

稲荷町遺跡 は厨川館か

盛岡に刻まれた歴史の足跡

樋爪氏の行き先 藤原氏①

奥州藤原氏は岩手県

内の南北の中央に置かれていた奥六郡(胆沢、江刺、和賀、稗貫、志波、岩手)の支配者。東北全域に大きな影響力を持ち、奥州で産出される金や馬、交易でよく大なる富を築き上げた。盛岡地域で藤原氏と関係が深いのが樋爪(ひづめ)氏とされて

いる。

樋爪氏の祖は清衡の4男清綱である。「尊卑分脈」には記されている。清綱は巨理(わたり)権十郎を名乗り、経清(清衡の父)と同じ巨理郡(宮城県南西に位置)を拠点としていた。

巨理郡は平泉文化圏の中に位置する。初代

清綱は藤原氏の足場となつた巨理郡を治め、2代目の俊衡は志波郡を治め樋爪姓に変えて

いる。現在の紫波町南日詰箱清水地内に樋爪館が造営されたのは12世紀。当時としては非常に大規模な土木工事によつて五郎沼を構築した。伝承によると、

ここを拠点として郡内の産金の管理をしていたと言われている。「吾妻鏡」には樋爪氏が樋爪館を焼き払い、

側位置し、雫石川と諸葛川の合流点付近にある12世紀の遺跡。宅地造成をきっかけとして1980年から行われた発掘調査で見つ

た。これまでに10カ所以上発掘されている。幅が10メートルある空堀が周囲を囲んでいるのが確認され、総延長で300メートル。この形は樋爪館に類似してい

る。内側と外側の一部に土塁、内部に建物群がみられる。がわらけ、中国製の白磁碗、渥美壺、須恵器が出土している。

同遺跡のある稲荷町は、藩政時代は下厨川村で現在の大館町と一

の空野秀文さんは「立地とすれば稲荷町遺跡は樋爪館、柳之御所だとかとそんなに変わらない。柳の御所は落差が多少あるが、稲荷町もそうだし、樋爪館も周囲が湿地。湿地の中に独立した台地を使つて館を構えている。戦争目的というよりは、地域支配の拠点、行政庁としての意味合いで建てたものではないと思つ」と話す。「吾妻鏡」の厨川館ではないかという見方だ。

これに対して蝦夷研究会の八木光則さんは、同遺跡から白磁な

どの出土が少ないことから、厨川館と断定するのは時期尚早と考えている。

県埋蔵文化財センターの相原康二所長は「稲荷町遺跡からは確

実に12世紀の物が出て

いる。かわらけ、白磁、

渥美焼が出ている。中

国産陶器、国産陶器、

かわらけ、これがそろ

つているのを平泉セッ

トとわたりは仮称して

いて、特にかわらけは

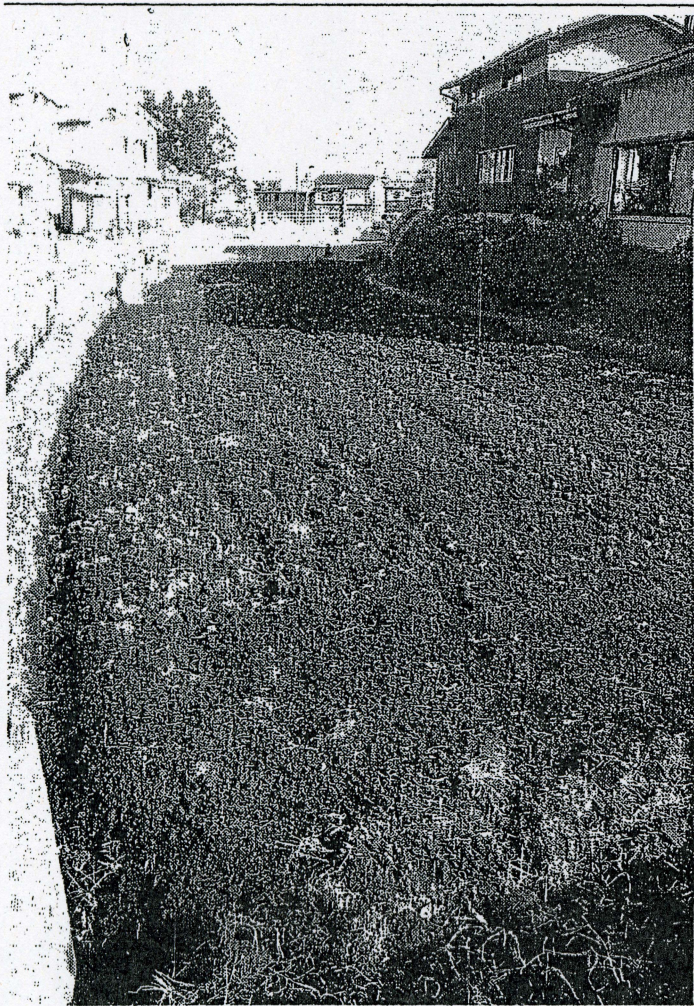
平泉と直結した人が

住んでいたと考えて

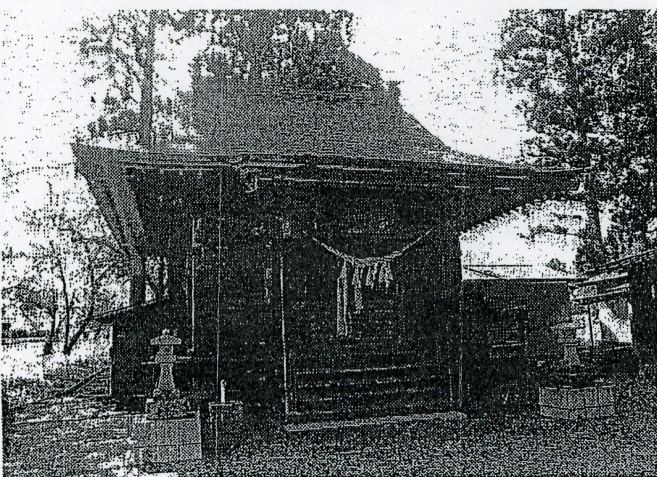
いる」と話す。室野さ

んと同様の見方だ。

(荒川聡記者)



稲荷町遺跡の堀跡



厨川稲荷神社

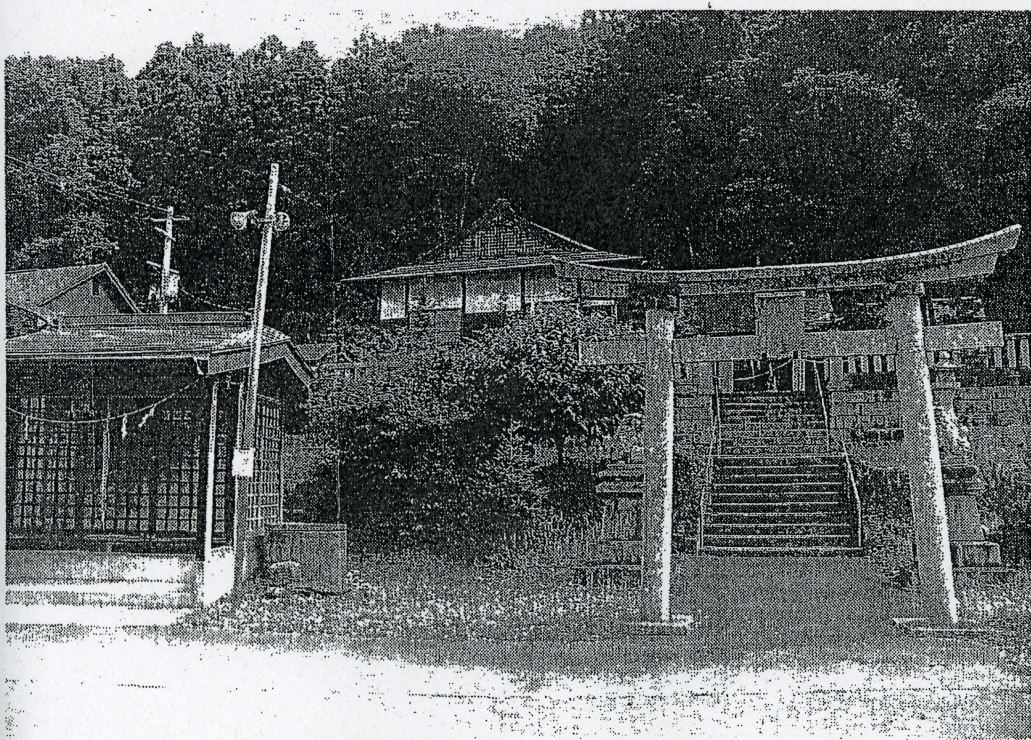
同遺跡のある稲荷町は、藩政時代は下厨川村で現在の大館町と一体の地域とされていた。地名は厨川稲荷に由来し、同稲荷はかつて稲荷町遺跡内にあった。現在では住宅街になっているが、一面に田畑が広がり、農作業中に土器や壺などが出土することは珍しくなかったという。大館という地名は大きな館、つまり厨川館ではないかと考える人もいる。

盛岡市遺跡の学び館

盛岡に刻まれた歴史の足跡

浅岸と下米内 藤原氏②

盛岡市内の浅岸と下米内。浅岸の薬師神社近くには堰根、前野、下米内には落合遺跡がある。米内には落合遺跡がある。



薬師神社

下米内の落合遺跡からは米内川から引水した用水路北側に大形掘立柱建物の屋敷と村落の遺構。溝をめぐらせた社殿が仏堂らしい遺構、用水路や仏堂から12世紀後半のかわらけが出土。屋敷跡からは常滑大かめの破片、仏堂は2間×3間で、その周囲を幅1.5、深さ50センチの溝が方形にめぐらされている。

浅岸の堰根遺跡は山ろくの段丘面に堅穴住居群。中津川南岸の山ろく台地、掘立柱建物、堅穴建物の屋敷群と村落。中央部に2間×5間（約32平方メートル）の大形掘立柱建物。常滑、渥美の瓶や鉢、中国製白磁碗、壺、かわらけ、鉄鍋や鉄族などが出土している。

同地内の前野遺跡は中津川南岸の平地にある。掘立柱建物の村落、溝で囲まれた社殿が仏堂、社殿が仏堂から12世紀のかわらけと須恵器系の壺。社殿と見られる遺跡は2間×3間、方形に溝（幅1.2メートル、深さ50センチ）がめぐらされている。

堰根遺跡と前野遺跡は別々に発掘されているが、蝦夷研究会の木光則さんは一つの集落だったのではないかと推測している。そうすると落合、浅岸の両集落内には、それぞれ仏堂が置かれていたということになる。

泉埋蔵文化財センターの相原康二所長は「手掛かりは三つ。一つは物、二つ目は伝承、三つ目は仏像。平安時代の仏像があるところには、ほとんど藤原氏関係の言い伝えがある。そういう目でみると必ず出てくる。平安仏があるというところはたまたまではない。だから絶対にはいい手掛かりになる」と話す。

浅岸の薬師神社付近には浅岸の遺跡、出土した白磁、仏堂に納められていたのは平安仏の可能性が想像されるが、それよりも薬師神社には薬師如来が納められていたと言われている。

薬師神社総代の百岡円次郎さん（76）によると、創建は社伝によると永祿元年（989年）に不來方太郎貞頼が勧請したと言われている。これが事実なら10世紀後半、安倍氏の時代ということになる。

現在のお宮は川の近くにあり、かつては裏山の山頂付近にあり50年くらい前までは旧参道を通じて人が出入りしていた。「神社奥宮跡に南部さんの見張り場が置かれていたと聞いています。このほか山の奥の天堤（あまつみ）にもあったそう。天堤というのは綱取スポーツセンター上のグラウンドをさらに上がった場所付近のこと。昔は山づたいで移動、馬が通れるくらいの幅の道だった」という。

この道は非常に古い道のようで百岡さんから三つ目の手がかりとなる藤原氏に関する伝説を聞くことができた。（荒川聡記者）

（荒川聡記者）

山伏の歩いた古道

盛岡に刻まれた歴史の足跡

薬師神社伝承 藤原氏③

奥州藤原氏の時代に、平泉から北の地とを結ぶ3本の主要な道があったと考えられている。

東の道は、北上川の東側を通って紫波町の赤沢地区と結んだ。東街道と呼ばれる。西

この3本の道を背骨とすれば、横の肋骨となる道があったと考えられる。

肋骨道を考える上で有力な手がかりとなるのが盛岡市浅岸地区にある薬師神社の裏を通る古道の存在。同神社

総代の百岡円次郎さん(76)の家には先祖が奥州藤原氏に仕えていたという伝承が残っている。

百岡さんは「藤原の残党が山伏となり、区界方面から山伝いで青森や秋田方面に行つた。私の先祖は名字を

変えて400年ほど山伏となり各地を放浪し、最終的にここに流れてきたと伝わっている」と話す。

先祖は古道を使つて浅岸に移り住んだという。この古道は藩政時代も明治以降も長く使われてきた。

近世(もんじょ)館を主宰する工藤利悦さんは、かつて浅岸の古道を实地調査している。

大正5年(1916年)に明治時代の街道を測量した地図(大日本帝国陸地測量部)と現在の地図を比較して推定した。

「この道は藩政時代にも使われ、江戸末期になって海岸警備が重要視されたときに文久年間(1861〜1864年)にもう一度道路を造り替えている」と話す。

この古道は、浅岸の元信と銭掛付近では別々の道になっているが、元信からの道は釜津田道(岩泉の釜津田と盛岡を結ぶ古道)の名残という。浅岸から大志田に入る手前で2つの道が合流し、山田線の第1浅岸トンネル(大志田〜浅岸駅間8

・4キロの中間付近)で

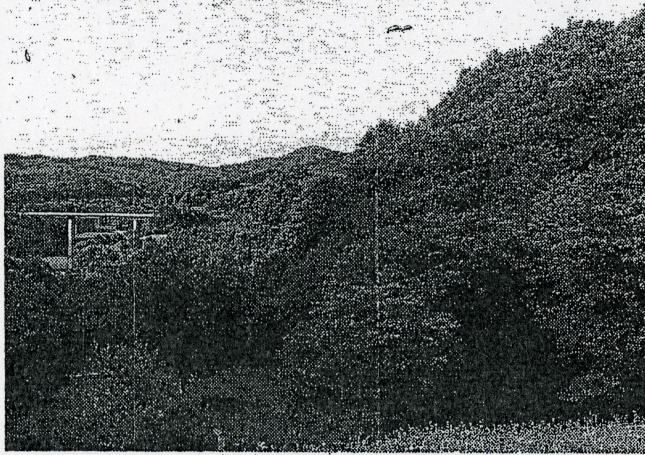
同線と交差、トンネルの上を通り芦毛山、彦部山と山の稜線(りょうせん)を伝わるように歩く。

標高は元信付近は500メートル程度だが、2つの道が合流し第1浅岸トンネルを越えると800メートルを超える。街道付近に住んでいた人たちは集落から上がって街道に入って通行していたという。道幅は2間(3・6メートル)で馬や牛に荷物を積んで移動する人が、ぎりぎりすれ違える程度の幅にな

つほど点在している。

工藤さんは「昭和20年(1945年)までは軍馬の牧場もあった炭焼きもいた。も一つ一つの言い伝えとすれば、敷川の方を通る道が厳しすぎてそのため山伝いに尾根を越えていく道を開発した。この道には一里塚が8

つほど点在している。わたしが調べたときは炭焼きがなくなつたため笹竹で道がふさがれていた。江戸時代に改修をされてはいるけれども、恐らくこれが宮古との交流の道だったのではないかと推測する。(荒川聡記者)



網取スポーツセンター付近の山。この辺りを古道が通っていた



玉山区芋田地内の武道八幡館跡

義経伝説あり

盛岡に刻まれた歴史の足跡

玉山区武道地区 藤原氏④

義経伝説は県内各地に多数あるが、盛岡市玉山区にもいくつか存在する。同区芋田武道地区内に武道八幡館跡と

「ラックス」の裏側で、岩手町方向に進行して左側に国道沿いからも見える小さい丘。ここに八幡太郎義家とともに義経を祀（まつ）った神社がある。

義経がこの地に逗留（とまりゆつ）し、馬場と言われる集落（十数戸）や武道で馬の練習をしていたと言われている。

観音開きの左戸の内側には「九郎判官源義経」の文字が見え、御神体は眷物、劣化が著しいため確認はできないが武具を着た武者の絵が描かれており、それが義経の肖像画と伝えられている。

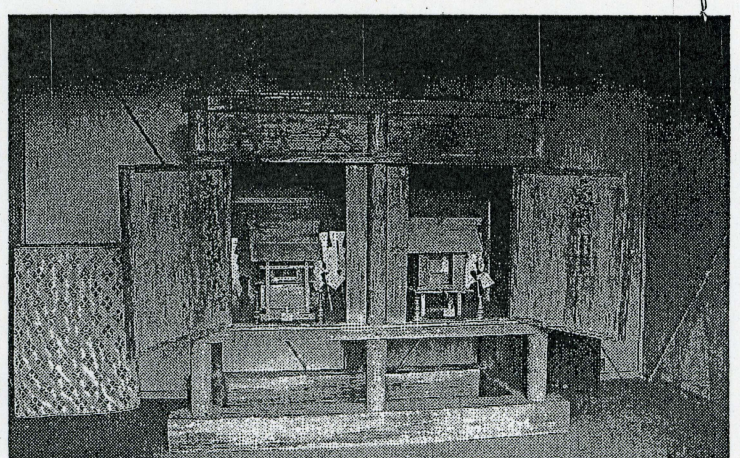
えられている。このお堂の近くには冷や水と呼ばれているわき水があるという。

丘の高さは20メートル。登り口以外は切り立った崖でとても上がれない。上から見下ろす道は真っ直ぐ国道4号に向かっており、地域の人たちは街道だと話しているが道の名前は分からないという。斜面のきつい坂のことをウド坂と呼ぶ。義経が馬の練習をした伝説と重なり武道の地名に転訛（てんぎ）したと玉山区の郷土史家の太田忠雄さんは話している。

近くに住む中年の女性によると、以前神社の境内の草刈りなどをを行った際に合わせて木を伐採したことがあり、「実は神様が宿る木だった」として伐採をした人はいくらも熱を出して、いたそでず」と語る。

「おばあさんから聞いた話だが、この神社は乞食（ぼえど）の宿だったそうです。そのころ（恐らくは大正か明治）には、米などを恵んでもらったあと、ここに泊まり食事を作っていたそうです」と語っていた。

境内にある出羽三山の石碑のうち、羽黒山という習慣があるの羽の文字には、お参（ま）りは参（ま）りした人がはめたと見られるさい銭があり、お堂は十数年前までの石の文字には、お参（ま）りは参（ま）りした人がはめたと見られるさい銭があり、お堂は十数年前までの



武道八幡館にある神社では源義経（左）と八幡太郎義家（右）を神としてまつている

はかやぶきの屋根で、建て替えに伴いひと回り小さくなっているという。夏には虫追い祭（むしおひまつり）をするなど、以前は年3回は祭事をしていった。鳥居も幾つかあったが今は登り口にある金属製の鳥居一つだけになっている。

近くにある芋田の蒼前駒形神社には義経の馬の供養碑があり、神社の近くには平安時代の遺跡も見つかっており、太田さんは玉山区と藤原氏のかかわりの可能性もあるのではと考えている。「あるいは山伏信仰のために作られた神社なのかもしれない」と話している。

（荒川聡記者）

泰衡が落ち延びた先



旧白坂観音堂



白坂観音堂前を通る古道

盛岡に刻まれた歴史の足跡

八幡平市の伝説 藤原氏⑤

奥州藤原氏の4代泰衡が平泉を落ちた後に、河田の謀反により殺害されたと言われている。文治5年（1119年）9月3日の「吾妻鏡」に夷狄嶋に向かう途中、家臣の河田次郎の賛（にえ）の柵（現在の秋田県大館氏の時代から交易ル

トがあり、藤原氏の時代には北方交易は重要な位置を占めていたと言われている。交易ルートを使つて逃げようとした可能性がある。泰衡北行の行程を記す文書はないが、八幡平市七時雨山付近から山伝いに歩いた可能性はある。七時雨山は、

盛岡市を出発し国道282号を進み、平館で国道を右折して直進。七時雨温泉の手前にある七時雨牧野の看板を左折すると旧白坂観音堂に到着する。右手に観音堂、左手に築師堂の看板が見える。旧西根町が建てた案内板によると、高さ1



七時雨の白坂観音堂に納められていた七面観音像、製作年は不明だが平安時代の作ではないかといわれている

藩政時代の絵図（正保、元禄など）には七し切（ななしきり）とも記され、現在もそうだが非常に険しい場所であった。同市内を通る鹿角街道は藩政時代以前から使われていたと伝えられており、近世こもんじょ館の工藤利悦さんに同街道の古道を案内してもらった。

尺2寸の七面観音、直径3尺4寸の大鏡が収蔵されていた。大鏡には延長8年（930年）に朱雀院が壽應山澤両寺（じゅおうざんたくりょうじ）を建立したことが書かれているといふ。

七面観音と大鏡は明治になって寺田市内の聖福寺に移されている。白坂築師堂からは、五尊像を線刻した瑞花双鳳八稜鏡（絵柄を蝦夷研究会の八木光則さんが調べたところ実はオシドリだったといふ）が見つかったといふ。

同観音堂前の道は、古代東北の流麗道の七時雨山越えのふもとにあたり、旅人の安全を願って建てられたと伝えられている。この付近を泰衡が訪れ、一泊したのではな

いかとも言われている。この道を進むと留の沢一里塚がみえる。ここは鹿角街道の旧道で、道路から階段を十数段上がったところにある。安代の桜松神社につながつている。鹿角街道の古道を通り安代地区に入る。安比塗とリンドウが有名。地区内には木地師の集落も存在していた。八幡平市博物館の矢萩昭二館長によると、安比塗に関する伝承があり平泉と結び付いてくるらしい。

矢萩館長は「天台寺の僧侶が平泉に行つて、そついつ技術を学び、お寺の器を作った。浄法寺にいた木地師が木を切り尽くし、安比川上流の畑地区に来たんだと言われている」と、安比塗の木地師にかかわる伝承を語る。「平泉ではおそろく京都の方から木地師を連れてきて作らせていたと思つたところが藤原氏が滅んだから木地師が離れ、その中からこつちに来た木地師もあつただろう」と推測する。安代は木が豊富だ。木地師の人数に對し余りある材料があつたから需要も少なく、移動するまでもなかつたと言われている。

（荒川聡記者）

盛岡に刻まれた歴史の足跡

浄土思想 受け継ぐ

鹿角、大館 藤原氏⑥

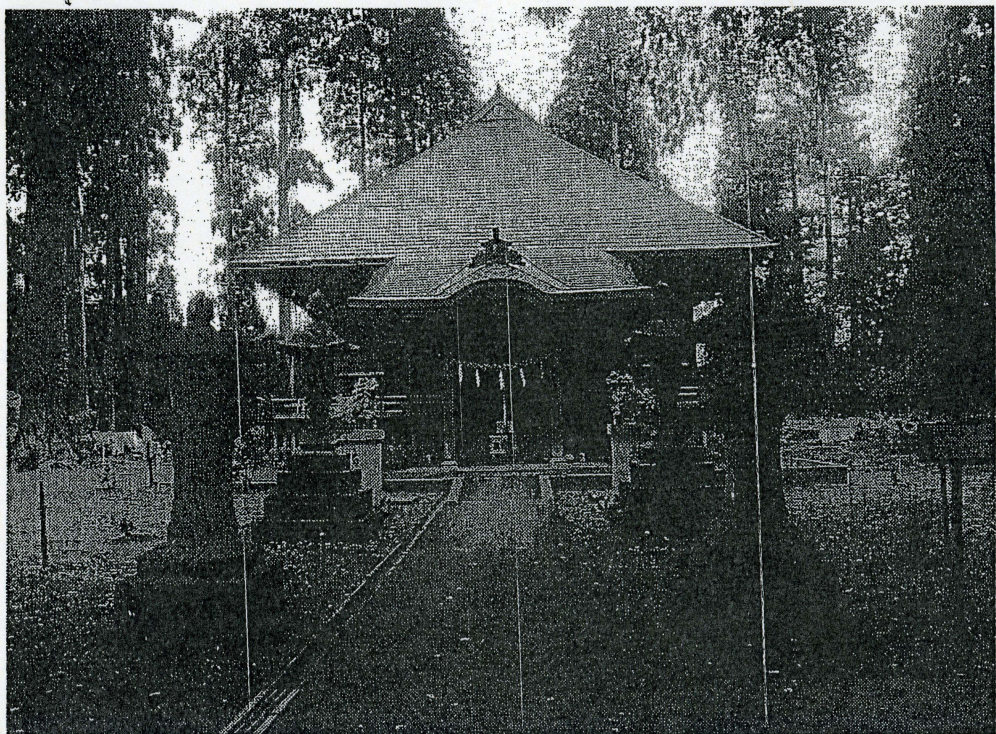
八幡平市から旧道を
通って秋田県鹿角市を
訪れた。同市八幡平字
谷内（鹿角市の南側に
位置）にあるのが天照
皇御祖神社。明治まで
谷内（たんない）観音

堂と呼ばれていた。山
の上には谷内城、周囲
にある高台はほとんど
岩（とりで）や館など
の跡だという。

神社の境内には磨崖
仏（まがいぶつ）がけ
に仏像を彫ったもの）
があり、東北の北限、
高さ6呎、幅7呎の巨
石に弥陀三尊が線刻さ
れている。中央の月輪
は96・5センチ中に阿弥
陀如来坐像、観音菩薩、
勢至菩薩を意味する梵
字が刻まれて鎌倉末期
の作という。

案内されて社殿に入
ると、大日堂舞臺の五
大尊舞のお面を紹介さ
れた。晴澤久富司は「大
日堂舞臺はユネスコの
文化遺産登録14件の中
でナンバーワンに入れ
られている。大日堂舞
臺の中で一番大事な五
大尊舞は、この神社
に伝わっている。面は
平安時代に作られた。
あまりにも古くなり昭
和にレプリカを作成、
現在使用している面は
平成に作られている。

独枯の金剛山大日堂（秋田県大館市）



大日如来（金剛界、胎
蔵界）、普賢菩薩、八幡
菩薩、文殊菩薩、不動
明王の六面。浄土思想
の一つで奥州藤原氏と
のかかわりは多分ある
と思うと話していた。

鹿角市の谷内を出て
大館市比内町に入る
た。道沿いには金山が

えられる）の氏神とな
ったが、大永2年（1
522年）の南部氏と
の戦いで大日堂が壊さ
れたとある。その後、
2回再建され、現在の
大日堂は寛文18年（1
673年）に建てられ
たものだという。
（荒川聡記者）

続く。この道は鹿角で
は大葛道（おおくそみ
ち）と言われており、
この途中に日詰という
集落を通った。紫波
の一族とされる樋爪に
関係した地名と思われ
るが、この地も何らか
のかかわりがあるのだ
ろうか。

日詰の先にあるのが
独枯（とっこ）。金剛
山大日堂がある。案内
板によると1100年
代の真言宗の霊場だっ
たという。

この地を治めていた
浅利氏（鎌倉御家人の
末裔（まつえい）と伝

泰衡殺害の地へ

盛岡に刻まれた歴史の足跡

錦、西木戸神社 藤原氏の

大滝温泉を抜ける
と、藤原泰衡を祭った
錦神社がある。錦神社
は幅2、3呎ほどの小
さな祠(ほこ)で両隣
は民家となっている。
大館市郷土資料館によ
ると、錦神社の前を流
れる犀川(さいかわ)
の対岸を贅(にえ)ノ
里と言つ。河田次郎の
贅の柵の跡ではないか
と推測されている。

吾妻鏡によると4代
泰衡は平泉を脱出。北
海道に向かう途中に立
ち寄った贅の柵で河田
次郎に殺害された。泰
衡の首は紫波町の陣が
岡にある源頼朝の本陣
に届けられたが、河田
次郎は君恩を仇で返し
た者として頼朝から処
罰を受けている。

大館市郷土資料館に
よると贅ノ里内の高村

高台が贅の柵である可
能性があるという。最
近、下水管の埋設工事
に伴う調査が行われた
以外、これまで発掘調
査が行われていないた
め、ここに柵があった
ことを証明する平安期
の出土品は見つかって
いないといつ。河田次
郎についても、吾妻鏡
に泰衡を殺害したこ

と、贅の柵の主であつ
たことなど断片的な情
報しかなく謎が多い。
錦神社の案内板には
地元の語り伝えを記し
ている。それによると、
泰衡をかくまつて罪に
なるよりも泰衡を討つ
て恩賞を得ようと考え
て計画を練つた。文治5
年(1189年)9月
3日の夜、多くの家来
を使つて源氏の大軍が
攻め寄せたように見せ
かけ、泰衡が観念して
切腹するように仕向け
成功した。首のない泰
衡の死体は住民たちの
手で錦の直垂(ひたた
れ)に大切に包まれて

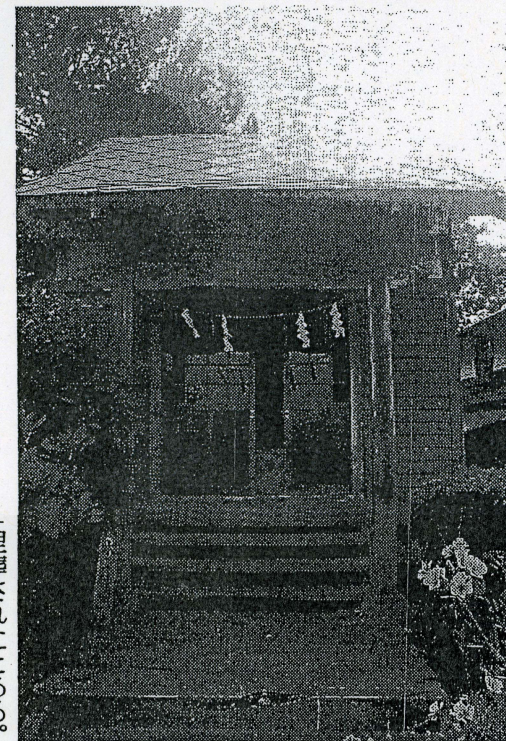
埋葬されたとある。
錦神社とのつながり
を物語るのが泰衡の妻
を祭った西木戸神社。
神社のある場所は八木
橋の字で五輪台と呼ば
れており、地元では館
が置かれていた話は聞
かれなかった。高台で
あり館があつた可能性
は否定できない。
ここは5軒の家が守
っている神社で今では
集落の守り神となつて

いる。もともとは遅れ
て到着した泰衡の妻
が、ここで夫が河田次
郎に殺害されたことを
知り悲嘆にくれて自害
した場所だといつ。住
民たちが五輪塔をおさ
めて靈魂を慰めた。社
名は泰衡の異母弟の西
木戸太郎国衡の領地だ
つたことに由来するとい
う。

(荒川聡記者)



藤原泰衡を祭っている錦神社



泰衡の妻を祭っている西木戸神社